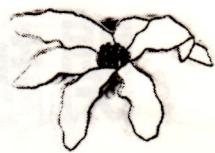


昭和61年11月10日

第41号

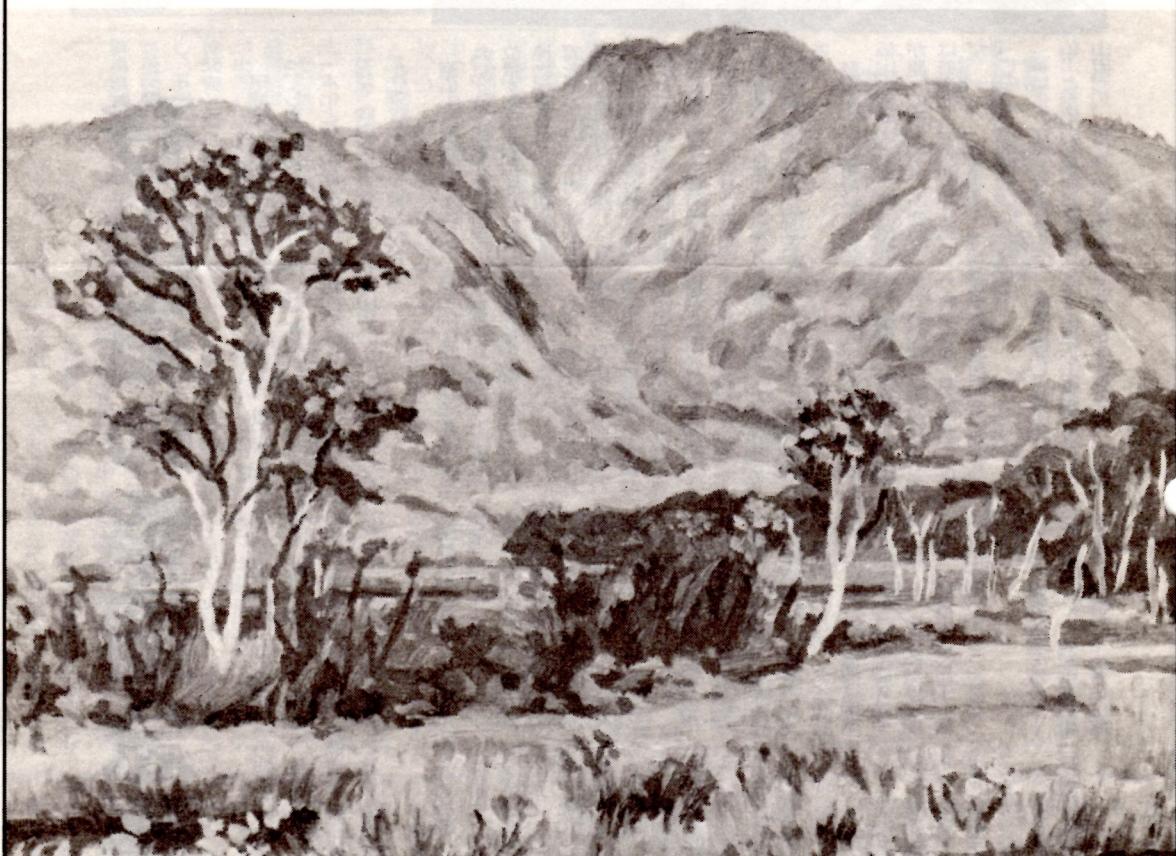
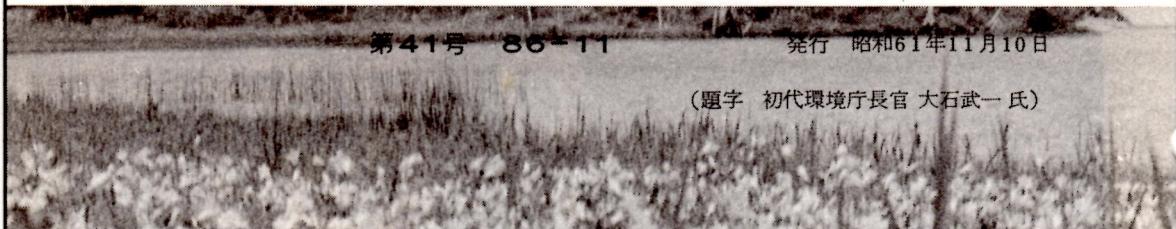
尾瀬の自然



第41号 86-11

発行 昭和61年11月10日

(題字 初代環境庁長官 大石武一 氏)

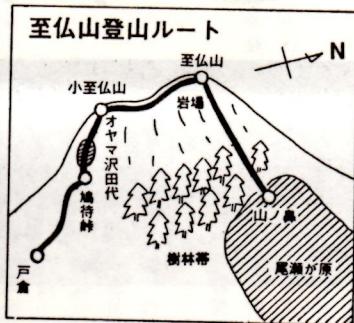


9月下旬の中田代湿原と景鶴山

— 等々力徹郎先生画 —

尾瀬の自然を守る会

関越道全通で登山者急増



尾瀬至仏山の高層植物が悲鳴を上げている。登山者の踏み荒しが原因だが、登山道が一つの間にか不明確になつてしまい、初めての人では、どこを歩いていいのか戸惑う状態。地元では五年前から、県などにルートの一本化と危険箇所の補修や整備を訴えてきたが、効果的な対策のないまま関越道が全通、日帰り登山も可能になった。同山では今シーズン、登山をハイキング程度にしか考えないハイカーの入山が急増しており、踏み荒しはよる深刻しそうだ。

至仏山（標高二千三百二十メートル）から至仏山頂に至る尾根道に九十九里は、尾瀬が原の西側には、無数の枝道ができており、位置する代表的山岳。一般的な植物群落の分断が目立つていて、植物が育ちにくい蛇紋岩が表しているため、森林限界は海拔七百六十メートルで、頂上までの間には高山植物帯が広がっている。その数は百種以上ともいわれ、同山にだけしかないシナツアサツキや、珍しいホンバヒナウスユキンウの群落なども随所に見られる。

登山ルートは城待峠—小至仏山—至仏山山頂（尾瀬）までの間で、所要時間は約七時間で、普通の人で六時間くらいだ。

このうち、踏み荒しによる「裸地化」が深刻なのは小至仏山と至仏山の東面および登山道周辺。特に、小至仏山か

ら至仏山頂に向かう尾根道では、ビニシヤジン、ホソバヒナウスユキンウ、至仏山頂と山ノ鼻を結ぶ岩地ではカトウコベやユキウリソウなどが軒並み踏まれ、十年前には、登山道を雨水が流れるため、浸食によって木道などの崩壊も著しい。このため、歩きづらくなつた規制のルートを登山者が避けて通ることから、踏み荒しは登山道の両わきに広がり、一部では幅三十メートル以上にわたつて荒廃している所もある。さらに、山ノ鼻に近い海拔千七百メートル以下の樹林帯でも同様の浸食が進んでおり約十年前、県が設置した木道の階段も使用不能の状態だ。

一方、尾瀬林業では今シーズン増加している登山者对策として、城待峠—小至仏山間

登山道の整備急務

山頂から至仏山頂に向かう尾根道では、ビニシヤジン、ホソバヒナウスユキンウ、至仏山頂と山ノ鼻を結ぶ岩地ではカトウコベやユキウリソウなどが軒並み踏まれ、十年前には、登山道を雨水が流れるため、浸食によって木道などの崩壊も著しい。このため、歩きづらくなつた規制のルートを登山者が避けて通ることから、踏み荒しは登山道の両わきに広がり、一部では幅三十メートル以上にわたつて荒廃している所もある。さらに、山ノ鼻に近い海拔千七百メートル以下の樹林帯でも同様の浸食が進んでおり約十年前、県が設置した木道の階段も使用不能の状態だ。

一方、尾瀬林業では今シーズン増加している登山者对策として、城待峠—小至仏山間にある湿原・オヤマ沢田代の木道と、本来のルートにあたる小至仏山の尾根道を整備してルートの明確化を図る予定だ。また、県とも至仏山東面の樹林帯で使用不能となっている木道や階段を補修するというが、着工の期日は予算の都合で不明確のまま。しかし、至仮山東面の岩場や小至仮山頂—至仮山頂間の尾根道に具体的策はない。

(注) 尾瀬林業は、今年すでに城待から至仮にいたる登山道の整備を行つてある。しかし増え続ける登山者の状況から見て有効か否かはわからない。登山者のマナーといふより、適切なガイドが付いての尾瀬入山の体制こそ早く整備される必要があるのだ。アヤメの次に減ぶ至仮よ。

7月31日(木曜日)

言

七

卷之三

八

奥鬼怒スーパー林道

自然保護団体が「待った」



長四十七・五キ。森林開發公

板木・群馬県境で進められている奥鬼怒スバーハ林道工事について、板木県自然保護団体連絡協議会（二十一団体、藤原信代表）は三十日、「環境省長官裁定などに違反しながら工事で、自然環境が破壊されている」として同県と農水省、環境庁、林野庁、森林開発公社に工事の即時中止を文書で申し入れた。群馬県自然保护団体連絡協議会（六四団体、高橋義男代表）も一両日にて、同一步調を取った。ところだが、森林開発公社側は「発注に先立ち、すべての工事は環境省と協議し、了承を得ている。工事途中の一工事を止め、違反したそれは遺憾」と反論している。

十一・三ヶが完成した。しかし八丁ノ湯→大清水間十六・二ヶについては、自然保護団体などの強い反対で中断した。

その後、当時の鰐川環境庁長官裁定（五十六年十一月）が出され、ついに環境庁が森林開発公団に留意事項を示し、五十八年十一月から工事が再開された。これまでに群馬県側は大清水から約七

団が国の補助と両県の負担金
き、栃木県側は八丁ノ湯付近

工事中止申し入れ 〔環境庁長官裁定に違反〕

環境庁長官裁定に違反

また、10月19日には玉原湿原に宇都宮大
学の藤原信教授を招いて、スキーヤー場開発と
ブナ林保護の研究会も開く。

一方、群馬県片品村と栃木県栗山村の村
議会議員が、10月2日に群馬側の工事現場
を視察、工事促進の運動を展開しようとして
いる。彼らは、現在工事中の道路が3-

(注) 尾瀬の自然を守る会群馬支部は、10月25日(土)午前10時、大清水に集合し、この奥鬼怒スープー林道工事の群馬側の現地調査を行う。工事担当者である森林開発公団、前橋事務所長も同行し説明を聞く予定である。

5mでは狭いと、奥鬼怒湿原の横を貫通するトンネルの幅も高さも小さい、と主張している。膨大な税金を注ぎ込んで道路をつくっても、一体どれだけの利益が地元に戻ってくるのか。林道として使い道のない林道をしやにむに作っている姿勢は、工事のための工事でしかなく時代錯誤である。森林開発公団の任務は、日本の自然を破壊し尽すことにあるようすら思える。

林道幅が鯨岡裁定の三倍に反し、五倍を超える所が随所にあり、十倍の所もある。環境省の留意事項では「切り土盛り土のノリ面は地元に生育するものと同じ植物(ヨモギ、ハギなど)で緑化する」とになっているのに、西洋牧草になつていて、西洋牧草の種子吹きつけ工法が行われている——などを指摘。また「必要最小限」と制限がつけられている支障木の伐採条件もさられておらず、八丁ノ湯周辺では、残土で沢を埋め立てており、豪雨、台風などで崩壊、下流に被害をもたらす危険性もあるとしている。

「国際青年の村'86」

ユースホーラムへの協力

総務省と(社)青少年育成国民会議が主催する「国際青年の村'86」行事が、7月末から一週間開かれましたが、守

る会から、伊与久、武の両自然保护指導員が、尾瀬でのア

クション・リサーチ(現地視察)とテーマ別ディスカッション(東京代々木)に、夫々手分けして、参加、協力しました。

「青年の村」は、「参加・開発・平和」をテーマとして、世界の若者を集めて実施されたもので、日本青年一五〇名を含め、総勢三〇〇名の男女が、和気あいあいとした交流、討議を通じて、福祉や環境の問題など二〇のテーマ別に、お互いの理解を深めようと企画されました。

両指導員が参加したのは、自然保護の問題をテーマとしたグループで、オマーン、バナマ、ブルガリア、合衆国、アイルランド、フランス、韓国と日本の青年男女、あわせて二〇名から成るグループで、これに主催者側から、朝らか

な福岡美人の石垣娘と国際型美人の内海娘(通訳を担当)の同行です。

参加者は、各グループ毎の課題を明らかとするオリエンテーションを受けた後、一泊

二日の日程で尾瀬に入りました。

参加者のいずれもが、尾瀬のようないくつかの高層湿原は初めてです。石油と砂漠の国オマーンからの参加は、観光省の若手官僚。オマーンには、海岸沿いに湿地帯があるが、自然保護の国民的運動はなく、やつと政府の手で植生図の作成にとりかかった段階のことです。尾瀬のようなコンバクトな自然の中に、年間一〇〇万人もの観光客が集まること自体、彼の目には異常なことと映ったに違いない。

夜行バスによる疲れもあって、三平峠の登りでは弱音をはく者も出た。付添いの石垣、内海、伊与久の女性陣が皆を励ます。林の切れ間から望む箱庭のような湖岸の景観には、幾百年來の旅人と同じく、世

界の若者達もその感概を新たにした。

パナマでは、焼畑農業によつて森林が失われているが、

国立公園の制度すらないといふ。しかし、学生が自主的に森林の破壊調査を行つたり、日本とアメリカから保護のための技術援助が行われるようになつたとのこと。

東京へ戻った翌日は、陽や

けで腕を真赤にさせた者を交

え、グループ員間でのディス

カッションが行われた。初め

に、武指導員から、尾瀬の古

い写真パネルを用いて、その

保護の歴史と課題についての

整理を行つた。開発途上国か

らの参加者が多かつたが、よ

くありがちな開発か保護かの

議論よりは、生活の便利さ、

豊かさを求める自分達の行動

が、貴重な自然や身近な自

然の喪失、破壊につながつて

いることへの反省が、各国の

若者から述べられていた。

(武繁春)

皆さん、よく協力してくれてほつとしました。帰国した後礼状をいただいたりして、お手伝いしてよかつたと思つてあります。本当に皆さん、有意義な経験を積まれたと思います。

(付添いのボランティア 石垣詠子さん)

「尾瀬の特徴を説明する、

（石垣詠子さん）

「尾瀬の特徴を説明する、

（尾瀬の特徴を説明する、

うのが実感である。

尾瀬沼のビジターセンター

をのぞいてみた。巨大なだけ

で中身は少ない。御池の駐車

場脇には、また巨大な休憩所

が建築されている。道路下に

あたる地下は、トイレになる

という。桧枝岐村の施設だが

観光客の増大をねらったもの

だろう。会津鬼怒川線の開通

(10月9日)があり、会津滝

ノ原(会津高原と名を変更)

からはバスで一時間余で、沼

山峠といふことで、ますます

観光化に拍車がかかつてき

る。すでに、関越自動車道

と上越新幹線で日帰り客が

ふえたという鳩待峠、尾瀬ヶ

原にも人糞がふえたというの

も会員の声である。

環境庁日光管理事務所の塚

本所長は、尾瀬はよくなつた

とのんきにうそぶいて、山の

鼻もビジターセンターに改築

しようとしている。花の名山

至仏山が瓦礫の山になるのは

時間が問題だ。塚本所長は知

らないのだ。至仏山も原と反

対側の斜面を少し下ればゴミ

の山だと、ある会員が話した。

登山者のマナーを求める時代

はすでに過ぎたのである。

今年の尾瀬

文責 武

尾瀬沼に錦鯉がいたという

のは、ちょっとした話題にな

つた。鮒や黒い鯉に混じって、

長蔵小屋の船着場に群れて

いた。以前、地塘に金魚がい

たことがあったというが、誰

かが持ち込んで放したものだ

ろう。悪質ないたずらという

よりも、そこまで来たのかとい

第八回尾瀬自然保護指導員養成講座



八月八日～十一日に、第八回尾瀬自然保護指導員養成講座が行なわれた。今回の参加者は九名で講師は会員の波戸瀬を守る懇話会の中本守氏（読売新聞編集委員）が特別

参加をした。

第一日目は、沼田駅に集合し、大清水から尾瀬沼を通じて桧枝岐に宿泊（ますや）。

第二日目は、御池から裏塚を通り温泉小屋へ。食堂で一般入山者にアピールを行なう。

二日目は特に見晴十字路におけるキャンプ場の見学、ゴミ

処理施設の見学が行なわれ、日本テレビの取材対象ともな

つた。また温泉小屋の夜は、そのテレビの関係で一緒にな

った群馬県の尾瀬自然保護専門委員である菊地慶四郎先生（県立武尊高校教諭）にアヤメ平における湿原回復に関するお話を聞く機会もあった。

三日目は、東電小屋から中

田代十字路に出て、先輩指導員と合流し、約一時間先輩指導員と組になつて入山者に対する自然観察指導を行なう。

そして、長沢から富士見へあがりアヤメ平を見て鳩待峰へ下った。アヤメ平においては

波戸瀬講師がかつてこの湿原においてアコーディオンでフ

ォークダンスを踊つたことな

どの回顧談も出て、その罪意識が現在の尾瀬にかかる姿勢の根っこになっている、といふ話は深みがあった。

四日目は、土出において高校生講座の坂井講師も一緒になり、研修のまとめが行なわれた。

四日目は、土出において高

校生講座の坂井講師も一緒になり、研修のまとめが行なわ

れた。

レポートから

森田洋子（群馬）

尾瀬に、本当の意味で自然やその美しさを求めて行く人は少く、「一回は行ってみなければ」という物見遊山で訪れる人が大半ではないかと言え。私もその一人だった。しかしそれでも尾瀬はそういう部分にも少なからず感動を与える。その感動の中で、心の中に「人間として」の「何か」が蘇生する。

自然がすり切れた現代人の心を蘇生する—現代人はその自然をゆがめることもできてしまう。尾瀬ではこの二つが交差していた。

矢部重秋（山形）

満身創痍の尾瀬を救うためには、尾瀬の観光地化をくい止めなければならない。まるでそこの観光地と変わりな

いではないか。尾瀬は自然の聖域と言わっている。聖城といふのは、元来だれも侵すことのできない所のことである。

つまり人間が入り込んではいけない所なのである。そういうところに人間は入つて行くのであるのだから、人間はそれなりのことは我慢しなくてはいけないのでないのではないか。たとえば、入浴 etc. . .

尾瀬は日本の財産であり、多くの人にその価値を知つてもらいたい。しかし現在皮肉にもその人の手によつて価値を奪われ様としている。もはやのつびきならぬ状態である。そこで下手人である我々は昔の様にしてやろうなどと懷古主義的立場をとるのではなく、たとえ人間にかかる負担が増えようとも、自然にかける負担を極力軽減させる努力をすべきである。そして人々が訪れても自然の「尾瀬」でなくしてはならない。腕章を、ワッペンをつけ「尾瀬」をおとずれることができた。あくまで天使

学者や知識人が恐れているゆつくりと進む自然破壊、美しく思い出を残したい人たちに「尾瀬」の恥部は絶対に見せたくはない。あくまで天使

八角清（栃木）

「尾瀬」を守る実行動でもあると思う。人をせめるよりも無言でうつたえたい。

石川好夫（埼玉）

初めて尾瀬は日本の「文化財」と言えよう。今、日本の文化が試されている。

本戸信男（東京）

尾瀬ヶ原は、湿性植物が立地しているだけと考えていた

が、泥炭層であるということを忘れてはいけない。

何といつても一番印象に残つていることは、山小屋から排水による植生の変化が見られたことである。富栄養化が進むにつれて本来の植生が破壊されていく姿をみると、自然保護の大切さを痛感した。

開発か、自然破壊か、社会問題としては決して新しくないが、開発によるメリットの方を重要視する傾向があることは問題である。

学者や知識人が恐れているゆつくりと進む自然破壊、美しい思い出を残したい人たちに「尾瀬」の恥部は絶対に見せたくはない。あくまで天使の「尾瀬」でなくしてはならない。腕章を、ワッペンをつけ「尾瀬」をおとずれることができた。あくまで天使

にしたり耳にしたりすることのない現状をとらえることが点からのものであり、普段思ふことのない現状をとらえることができ、尾瀬の自然について多

く考えさせられました。尾瀬は自然保護の発祥の地といわれるぐらい様々な問題を抱えています。水資源や林道などの行政レベルのものから、トイレなどの個人レベルのものまで幅広く問題を抱えている。

畑 昭夫（東京）

尾瀬についてのアピールは先ず高校、大学の山歩きに關係あるサークルなどにも、もつとなされなければいけないのではなかろうか。そういうことは既に行なわれているかもしれないが、私は尾瀬ばかりでなく日本の自然を守るために、もつと高校生、大学生の力を活用すべきではないか。そういう施策が検討されてもいいのではないか。

田辺史生（埼玉）

第一回 高校生自然観察講座

八月八日(土)、第二回高校生自然観察講座は尾瀬ヶ原と至仏山を中心に行なわれ、七人が参加し、講師は会員の坂井、矢根があたつた。宿泊は鳩待山荘。

レポートから

笛尾 洋(世田谷学園)

のではなかろうか。そういうことは既に行なわれているかもしれないが、私は尾瀬ばかりでなく日本の自然を守るために、もっと高校生、大学生の力を活用すべきではないか。そういう施策が検討されてもいいのではないか。

尾瀬を理解してもらいためには、自然観察会のような形が有効でないかと感じています。これまで尾瀬をそれ程深く考えたことがなかつた者に、尾瀬にはこんなひどい所があると汚点ばかりを見せて歩いても、そんなものは街に戻れ

けないと気を配る事が大切だ
と思う。
至仏への登山道の途中にあ
つた荒れた湿原。一人が足を
ふみいれればみんなが入つて
いいと思う。それはまちがい
だ。美しい自然を人間は、そ
つとしておくことができない
のだろうか。

小六のとき私は二百以上も
の鳥の名前を知っていました
が、いまは天文がよくて勉強

キャンプを楽しみたいという
人も来てしまうのではないか
と思いました。

尾瀬ヶ原に入ると、たった
数行の説明のために太い丸太
が打ち込んであつたり、原に
侵入して板を並べて休憩所を
作つたりして、湿原を破壊し
ているのがわかりました。そ
して休憩所を作つたために、
観光客がそこで食事をして、
その食べ屑が原に残つてしま
うこと、山の鼻のキャンプ場

キャンプを楽しみたいという人も来てしまうのではないかと思いました。

尾瀬ヶ原に入ると、たった数行の説明のために太い丸太が打ち込んであつたり、原に侵入して板を並べて休憩所を作つたりして、湿原を破壊しているのがわかりました。そ

視線を足元に移すと、水！土
が湿つていて、しかも水がわ
ずかながらたまつていて。歩
していくと水草であるオゼコ
ウホネやヒツジグサが生える
くらい深さのある池塘がある。
本当に湿地なんだなあと感激
した。

視線を足元に移すと、水！土が湿つていって、しかも水がわずかながらたまっている。歩いていくと水草であるオゼコウホネやヒツジグサが生えるくらい深さのある池塘がある。本当に湿地なんだなあと感激した。

の高さから入ったので、沼田に近くなると草木の名前がわからなくて残念だった。
古屋　秀記（世田谷学園）
尾瀬には本当にたくさんの中植物があると思いました。一つの場所でかなりの種類の植物が出たというのに、先に進むともう別の草花が現われてくるからです。鳥もたくさんいました。ウグイスのさえずりなどは耳に焼きつくぐらい聞きました。

の高さから入ったので、沼田に近くなると草木の名前がわからなくて残念だった。

自然観察講座

していません。でも尾瀬での一番の収穫は鳥です。期待どおりでした。見たのはウグイス、アカゲラ、コガラ、シジユウカラ、メボソムシクイ、ホシガラス、ホオアカ、イワヒバリ、トビ、ハシブトガラス。声だけのはウソ、コマドリ、ミソサザイ。私は長野の蓼科でウソは見ました。とてもきれいな鳥でした。

山中 康恵（桜陰高校）

尾瀬にキャンプ場があるのはおかしいのではないかと思いました。これでは尾瀬を見たいという人ばかりでなく、キャンプを楽しみたいという人も来てしまうのではないかと思いました。

尾瀬ヶ原に入ると、たつた数行の説明のために太い丸太が打ち込んであつたり、原に侵入して板を並べて休憩所を作つたりして、湿原を破壊しているのがわかりました。そして休憩所を作つたために、観光客がそこで食事をして、その食べ屑が原に残つてしまふこと、山の鼻のキャンプ場

田村 繩世（農大一高）

山の鼻でしばらく休憩しながら、尾瀬ヶ原のできかた、植物の分布など展示してあったパネルをもとに教わった。このとき雨はもうやんでいた。雨のため双眼鏡を置いてきたことを後悔した。

湿原に入ると木道があつて右側通行となっていた。ひたすら湿原が広がつていた。ちよつと見た目には釧路の湿原と変わらないよう見えたが、視線を足元に移すと、水！土が湿つていて、しかも水がわずかながらたまつている。歩いていくと水草であるオゼウホネやヒツジグサが生えるくらい深さのある池塘がある。本当に湿地なんだなあと感激した。

菅野 公深（農大一高）

尾瀬を少し歩き、先生の話を聞いて植物の名前を知り、自分の目で見、耳で聞く。自分の体全体で自然というものが宿泊施設の生活排水の流れしも、もともと栄養の少ない原に栄養を提供してしまっている。尾瀬に来て先生方がたくさんお話をうかがつて尾瀬をしつかり守つていかなくてはならないと思いました。

山に登ったときの途中、人のために荒れ地になつた所を見ても、人がむやみに歩きまわることが自然を壊すことになることを学びました。

高林 透（町田高校）

「木道は小屋の食糧やボンベを運ぶ人優先である」という看板が立っていた。これは「お前さんたちが今晚食べるものを苦労して運んでいるのだから道を開けなさい」という意味だろう。つまり尾瀬の小屋の人は、自分の小屋は尾瀬に必要だと思つてゐるのだろう。小屋の存在といふものを考えてみる必要がある。

講座に一言、急に千六百mの高さから入つたので、沼田に近くなると草木の名前がわからなくて残念だった。

古屋 秀記（世田谷学園）

尾瀬には本当にたくさんの植物があると思いました。一つの場所でかなりの種類の植物が出たというのに、先に進むともう別の草花が現われてくるからです。鳥もたくさんいました。ウグイスのさえずりなどは耳に焼きつくくらい聞きました。

文献を辿つて—8—

波戸場秀幸

ここ何年間か、尾瀬関係の書籍の出版数は急上昇している。その中でいくつかを整理してみると、先ず豊かな植生

を有する尾瀬の花や植物を
とめた書物があげられる。
尾瀬の花・布施正直(昭56)
尾瀬の植物・堀正一(昭56)

尾瀬花の旅・軍司秀峯昭60
いずれも美しい尾瀬の花を
撮影した写真で、その特徴や
性などの解説をつけ、観光の
尾瀬としてではなく、花や植
物を通して尾瀬の自然に触れ
ようとする良き案内者として
の役割を果している。

更に、尾瀬の植物や植生に関する深めるために『尾瀬の植物観察』宮前俊男（昭56）があげられる。

又 同様の觀光宣傳的でなく、貴重な尾瀬としてとらえ
た書物として、

白旗史朗（昭59）大和書房刊

尾瀬一上毛文庫2—齊藤晋
(昭60)上毛新聞社刊

がある。

写真集「尾瀬」は、モノクロ、カラーを問わずかなり出版され、特に最近のカラー印刷技術の進歩によつて立派な

貴重な文部図書である。尾瀬の成因・地塘の動植物・湿原の生態系・森林や高山帯の動植物・尾瀬の食物網が記され失なわれゆく生態的安定性と尾瀬の危機を訴え、保護についての方策まで記述され、昭和47年出版のみやま文庫尾瀬一その自然の回復—以来の画期的な書物である。

として二十年余りファンタジーを通して尾瀬に接して來た。白旗氏が、尾瀬の生成と変遷・尾瀬の自然と風物・桧枝岐と片品村といった自然科学から民俗学の分野まで筆を走らせてゐたユニークな書物である。

「上毛文庫・尾瀬」は、学

○尾瀬・白旗史明(昭49)朝日新聞社刊
○尾瀬日光・奥村土牛他(昭52)毎日新聞社刊
○尾瀬○△■・新井幸人(昭60)時事通信社刊

ースの中で若干の文献に触れ
つつ拙文を続けてきたが、記
されねばならない貴重な文献で
触れもせずに終わるきらいが
あることを御容赦願つて筆を
置いて、自然保護を考え、学び
行動する"市民の会"です。昭和四十六年八月尾瀬を通る
国際観光ルート沼田一田島線
建設反対運動の際に発足し、
その後幾多の困難を経ながら
会員の努力によつて運動が続
置く。

尾瀬文献として落せないものとして、
。尾瀬の保護と復元－福島県特殊植物等保全事業調査報告書－福島県・毎年刊
。尾瀬の自然保護－群馬県特殊植物等保全事業調査報告書－群馬県・毎年刊
があり、毎号といかなくも、尾瀬沼を中心に汚染問題の調査研究報告書を掲載している群馬県衛生公害研究所年報、植生植物研究報告を掲載してゐる群馬生物－群馬県生物教育研究会（年一回刊）があることを忘れてはならない。
更に異色な書物として『尾瀬の旅と地名・京極美（昭48）』と『歌集・尾瀬沼のはとり・平野長英靖子（昭54）』があることも記しておきたい。

二千を越える『尾瀬関係文獻図書目録』（昭61・煥平堂刊）を整理しながら、「文献を辿つて」と、限られたスペースの中で若干の文献に触れつつ拙文を続けてきたが、記さねばならない貴重な文献で触れもせずに終わるきらいがあることを御容赦願つて筆を置く。

「尾瀬の自然を守る会」は日本における自然保護運動の発祥地・原点である尾瀬において、自然保護を考え、学び行動する『市民の会』です。昭和四十六年八月尾瀬を通る国際観光ルート沼田・田島線の建設反対運動の際に発足し、その後幾多の困難を経ながら、会員の努力によって運動が継

入会のおすすめ

「尾瀬の自然を守る会」は日本における自然保護運動の発祥地・原点である尾瀬において、自然保護を考え、学び行動する「市民の会」です。昭和四十六年八月尾瀬を通る国際観光ルート沼田-田島線建設反対運動の際に発足し、その後幾多の困難を経ながら会員の努力によつて運動が続けられております。

尾瀬を愛する皆さん、小さな力でも合せれば、一粒の雨滴が大河になるように大きな力となります。どうぞ、この運動にご参加下さい。そして日本の自然を守り、いつまでも心豊かな人間生活を送ろうではありませんか。

尾瀬の自然を守る会 東京 6-1-38

023

事務局日誌

尾瀬の自然	39号発行
幹事会・例会	研修会
講師・横山隆一	
幹事会・例会	第11回尾瀬の夕べ
高崎市労使会館	
講師・氏家淳雄氏	
入山者現地指導	
環境週間協賛行事	—
(団体指導)坂井他	
道工事の現地視察	
講師・藤原信氏	
懇話会メンバー	7/1
尾瀬視察を案内・内海	6/29
幹事会・例会	7/5
平標・仙ノ倉山観察会	6/21
講師・林ふさ子	6/30
幹事会	5/30
講師・高井昭	6/13
懇話会小委員会・内海	7/12
国際青年の村 ⁸⁶ で尾瀬	7/15
に。引率指導伊与久	7/27
武	8/8
指導員養成講座	11
第8回尾瀬自然保	

8/8 △	波戸場・武・坂井
観察講座	坂井・矢根
指導員による入山者現地指導	飯塚他
8/10 △	教員研修講座
内海・河内	尾瀬の自然・40号発行
尾瀬懇話会小委員会・内海	懇話会への意見調整のための委員会
幹事会・例会	室内講座・例会
講師・河内・内海	原観察会・現地視察
10/10 △	交通公社(大阪)
10/10 △	団体指導
10/10 △	坂井・狩谷
10/14 △	アヤメ平・尾瀬ヶ原
9/10 △	裏塙観察会
9/6 △	懇話会・例会
9/5 △	室内外講座・例会
9/5 △	原観察会・現地視察
7/20 △	尾瀬懇話会小委員会・内海
6/21 △	幹事会・例会
8/21 △	内海・河内
8/22 △	内海・河内

△秋季観察会の報告▽

十月十日（金）から十月十一日（土）にかけての秋季観察会は、雨の中であつたが、湯の小屋林道とアヤメ平の二カ所の観察を中心に行なわれた。参加者は、東京から武、水沼、牛木、草野、青木、群馬から飯塚、丸橋、上野の八人が参加した。他に早稲田大学の学生で、卒論に「尾瀬の自然を守る会」を選んだという会田晋平君が参加した。

十日は、宝川温泉朝日小屋に一泊。頑丈なつくりの小屋の中で猛々たる煙をあげての炊事を行なつた。上の原高原を買い占めて、スキー場とゴルフ場を経営しようとする西武が建てた豪華ホテル「水上高原プリンスホテル」を見る。玄関には西武優勝の横断幕がかかるつている。堤社長が「地元の人には泊まれないが：」と豪語したというが、オープニングで招待したのか福田赳氏を中心とする自民党的安倍派が派閥の総会を開いた。

湯の小屋林道は、こんろく峠を境に戸倉側、水上側も残こすところ三、四キロの舗装を終了すればできあがりだ。

戸倉側は雨の中を急ピッチで工事が進められていた。この勢いだと年内に完成しそうである。しかし、道は狭く大型観光バスの通行は無理だろう。路線バスも小型にする必要に迫られるだろう。

開通すれば水上から鳩待峠まで何の関門もない。マイカーラッシャーは目に見えている。戸倉でマイカーを止め、湯の小屋でマイカーを止める厳重な規制を要請したいものだ。

アヤメ平では、種をまきゴザを敷く復元工法が進んでいるが、湿原の回復はむずかしいようである。
(青木記)

事務局	編集	発行者	発行日	尾瀬の自然を守る会
03 等 1 学 425 校 1 生 4481 物 内 教 43 室 内	東京農業大學第一高 区 横 3 1 33 1 町田・青木 中島・水沼 岸好人	〒156 東京都世田谷	昭和61年11月10日	第41号

<u>入会申し込み書</u>	年 月 日	<u>16</u>
1年分会費2,000円を添えて申し込みます。(学生1,000円)		
名前(ふりがな)		男 女
<hr/>		
現住所 〒() MTS	年 月 日	自宅電話() 電話()
勤務先		